

鳥瞰図に描かれた別府温泉

－近代ツーリズムと吉田初三郎らのまなざし－

大山 琢 央

I はじめに

近代ツーリズムの影響のもと、温泉地は保健衛生的な機能を重視した湯治場から、行楽・保養・慰安を目的とする観光地へと移行していった。近代ツーリズムとは「旅」から「旅行」への転換とも換言できる。旅というものは様々な近世までの社会的制約や、移動に際しての苦労や危険を承知で行ってきた行動であり、旅における不要なリスクが排除されていく過程が「旅行」という新しい概念を生み、大正～昭和初期に近代ツーリズムを成立させることになった。

近代ツーリズムの成立条件とは、関戸(2007)が指摘しているように、①安全・高速・定時・大量輸送できる交通基盤の整備、②経済的に豊かで休暇を取ることが出来る人々の増加、③受け入れ地におけるサービスの充実、④メディアによる観光情報の普及などが挙げられる。

1872年(明治5)の鉄道開業後、60年が経過した大正・昭和初期には鉄道ネットワークが全国を網羅、船舶においても国内航路・海外航路が充実した客船の黄金時代であった。都市部では「新中間層」⁽¹⁾が台頭し、「大正ロマン・昭和モダン」文化のもとで、彼らの旺盛な消費行動と知的好奇心が、旅行・レジャーへと駆り立てていった。また、観光地や宿泊施設のサービス改善が進み、「茶代」の廃止運動⁽²⁾や、温泉旅館における内湯整備が活発に行われた。洋式のホテルが各地で新設、ないしは既存の旅館を改装した形で広がったのも同時期である。当時の政府は、外国人観光客を誘致して外貨獲得を目指す施策を打ち出していたからである⁽³⁾。

旅行ブームが盛り上がりを見せると、観光地では増加する旅行者を獲得するための広告宣伝競争が激しくなっていった。新聞広告、ポスター、リーフレットの作成、当時盛んに開催された博覧会への出品など、様々なメディアを通じた情報発信を行っていた。また、旅行案内・ガイドブックが大量に出版されて、旅行者が事前に旅先の知識やイメージを得ることが容易となった。そして当時、ガイドブックやパンフレットなどの挿絵地図として多く採用されたのが「鳥瞰図」であり、その代表的絵師が本稿で取り上げる吉田初三郎である。

鳥瞰図とは、飛んでいる鳥の目で斜め上方から見下ろした様な立体的な地図、または風景図のことであり、広い範囲の風景を取り上げて描いていることから、パノラマ地図とも呼ばれる。

近代の地図に関して、従来の歴史地理学では官製地図に対して学問的関心が向いており、鳥瞰図のような民間地図はこれまで研究対象とされてこなかった。加えて、美術史においては美術品としては認められず、かといって歴史学でもまともな研究対象としては扱われず、長らくどの学問分野

からも近代の鳥瞰図は十分な学術的検討がなされてこなかった。しかし、鳥瞰図に関する研究、とりわけ初三郎の作品については近年盛んに研究が進められつつあり、90年代以降、各地の博物館などで展示される機会⁽⁴⁾が増えるとともに、多くの関連出版物が刊行され、初三郎の業績・画業の見直しと再評価が行われている⁽⁵⁾。これに前後して、歴史地理学でも鳥瞰図・風景写真・観光案内などのビジュアルメディアを扱った研究が行われるようになり(中西・関戸編(2008))、他にも、橋本玉蘭齋(五雲亭貞秀)の鳥瞰図の空間構成を分析した高橋(2005)や、明治・大正期の巖島の鳥瞰図から景観イメージについて考察した中西(2010)などの研究成果がみられる。一方で、個別の事例研究の蓄積は十分とは言い難い。

そこで本研究では、近代ツーリズム期に温泉観光地として飛躍的發展を遂げた大分県別府温泉郷を事例に、同時期に描かれた初三郎作品を中心とする鳥瞰図の記載内容の特色を分析考察し、作成主体が認識する別府温泉郷の景観イメージについて明らかにすることを目的とする。

II 吉田初三郎と鳥瞰図

(1) 鳥瞰図の系譜

古来、空から見下ろした鳥瞰図的構図や表現の作品は見受けられるが、とりわけ江戸時代後期から明治初期にかけて、江戸の市街地や日本列島、あるいは開港後の横浜などの都市をパノラミックに描きだした鳥瞰図が数多く制作されている。1809年(文化9)に描かれた「江戸一目図屏風」で著名な鋏形蕙齋や、葛飾北斎、五雲亭貞秀などの絵師が知られている。例えば鋏形蕙齋の「日本名所之図(日本一目図)」では房総半島の南東沖に高い視座をとり、弓なりの日本列島を更にデフォルメした構図が特徴的である(図1)。また、蕙齋とほぼ同時代の絵師である葛飾北斎の「東海道名所一覧」(1818年(文政元))では、実際の形とは違った極端に曲がりくねった双六のような街道になっている。宿場町や名所の順序は正しいが、互いの位置関係は奇妙で大きく歪んでいる(図2)。

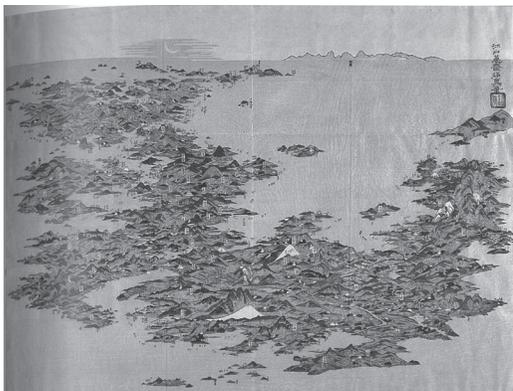


図1 「日本名所之図(日本一目図)」鋏形蕙齋・画



図2 「東海道名所一覧」葛飾北斎・画

大久保(2004)は、「江戸後期から明治初期にかけての鳥瞰図は、名所景観を構成する細部の詳しい情報を提供するためには空間のデフォルメをまったく厭わず、そのため視覚的リアリティの実現

が二の次にされることも少なくなかった」と述べている。一方で大久保(2004)は、歌川広重が描いた「東都名所」全24図が、手なれた透視図法を用いて地形のデフォルメの少ない、極めてリアリティの高い景観描写を行っていることも指摘し、後の五雲亭貞秀が描く横浜市街図にも大きな影響を与えたと考察している。

このような江戸後期以降の鳥瞰図の系譜の中で、蕙斎・北斎らの構図や技法に影響を受け、日本独自の鳥瞰図技法の伝統を最大限に発揮した絵師が、大正～昭和初期に登場した吉田初三郎である。

(2) 鳥瞰図絵師・吉田初三郎

吉田初三郎は1884年(明治17)京都市中京区に生まれた。西陣の友禅図案絵師「釜屋」への奉公、京都三越呉服店友禅図案部での勤務を経て、日露戦争従軍の後、1906年(明治41)に関西美術院で洋画を学んだ。同美術院長であり京都画壇の重鎮であった鹿子木孟郎に師事し、本格的な洋画修行に入るも、鹿子木から商業美術の世界に転向することを勧められた。心ならずも大衆画家への道を歩み始めた初三郎であったが、創作活動の転機となったのが1913年(大正2)に京阪電鉄から依頼された「京阪電車御案内」という鉄道路線図(図3)で、これが皇太子(後の昭和天皇)の目にとまり、「こ

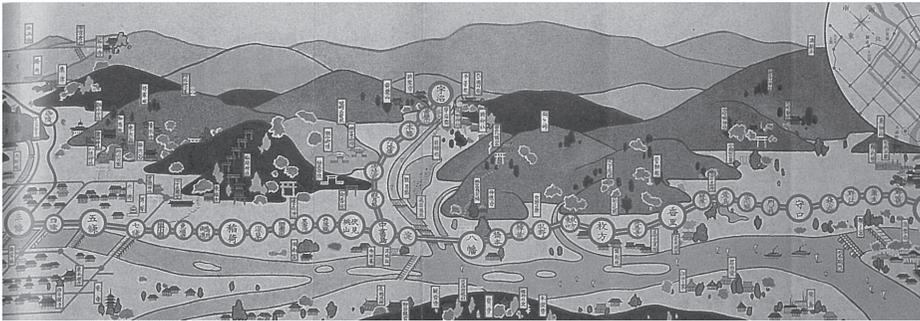


図3 「京阪電車御案内」1913年(大正2) 吉田初三郎・画

れは綺麗で分かりやすい。東京に持ち帰って学友に分ちたい」と称賛された。初三郎は大変感激し、「図画報国」の念を誓い、以後、終生の発奮材料としたと言われている。

1921年(大正10)には鉄道開通50周年を記念して、鉄道省より依頼されたガイドブック『鉄道旅行案内』の装丁と挿絵を担当した。初三郎は5カ月間をかけて全国の名所旧跡を実際に取材し、スケッチをしている。数多くの鳥瞰図・名所図が掲載されたこの本は、発行1年余りで40回も増刷をくり返した大ベストセラーとなった。これによる初三郎の評価は一躍高まり、全国の都市、旅館、ホテル、鉄道会社などから鳥瞰図作成の依頼が急増することとなった。

さて、初三郎が生涯に手がけた鳥瞰図の総数は実に、1600点以上あると言われている。特に最盛期であった1929年(昭和4)の1年間に限ると、制作点数は108点以上あり、非常に多作の絵師であったことが分かる(藤本(2001))。これらの作品数は個人の画業としては不可能であり、多くの制作依頼に対応するために初三郎は、「大正名所図絵社(後に観光社)」という鳥瞰図作成のプロダクション(工房)を設立し、多くの弟子たちと共に完全分業制で制作にあたった⁶⁾。鳥瞰図の依頼があると、

初三郎は現地に赴き、詳細な取材スケッチを時には100枚以上描いたとされる。工房に戻ると、下図までを本人が描き、着色などの作業は初三郎の指示のもとで弟子たちが仕上げていた⁽⁷⁾。弟子たちは後に独立し、金子常光や前田虹映といった著名な鳥瞰図絵師として活躍することとなる。

すなわち、「初三郎」ブランドによる弟子との「共同作品」が鳥瞰図の大量生産を可能にしたわけであるが、この他にも印刷技術の進歩により、安くて大量に鳥瞰図を印刷発行できたことが⁽⁸⁾、大正・昭和の旅行ブームの中で土産品として、また観光地の広告・宣伝メディアとして大きな役割を果たしていた。

初三郎の鳥瞰図は、図の中央部分を詳細に描くのに対して、両端をはるか上空の超広角の魚眼レンズで覗いたかのような独創的な構図が特徴で、「初三郎式(鳥瞰図)」と呼ばれた。図4は、その典型的な作品で、岡山市を描いたものである。岡山城や後樂園を中心に、市街地の建物や道路は非常



図4 「岡山市を中心とする鳥瞰図」1932年(昭和7)吉田初三郎・画 (筆者蔵)

に細かく描かれており、現地での詳細な実地調査とスケッチを元に、時には地形図・地勢図等の地図資料を活用した正確性の高い表現を心がけていた点が反映されている。一方で、図の両端はU字形に大きく歪んでねじ曲がっている。その先には絶対に見えるはずもない東京や富士山、はるか釜山までも一枚の絵の中に収めている。この「リアルさ」と「過剰なデフォルメ」が同居する不思議な空間構成は圧倒的人気を誇った。それは、当時の他の鳥瞰図の構図に影響を与え、多くの類似品・模倣品を生み出すとともに、初三郎作品の愛好会や展覧会が開催されていたことからもうかがえる⁽⁹⁾。

Ⅲ 「別府温泉」にみる初三郎式鳥瞰図の変遷

オリジナリティあふれる初三郎式鳥瞰図は、初三郎が常に新しい画風を模索する中で、徐々に定型化していったとされている。別府を描いた初三郎の鳥瞰図は、1917年(大正6)から1930年(昭和5)にかけて、確認されているだけで9種類が存在する(表1)。これは初三郎の画業の初期か

表1 吉田初三郎 別府(温泉)関連鳥瞰図作品一覧

鳥瞰図タイトル	発行年	発行元(依頼主)
「別府温泉御案内」	1917年(大正6)	日名子旅館 ほか
「豊後新別府温泉御案内」	1923年(大正12)か?	
「別府温泉地獄めぐり 別府市を中心とせる東九州の交通」	1924年(大正13)	別府宣伝協会 ほか
「別府温泉遊覧御案内 泉都別府を中心とせる名所交通図」	1926年(大正15)	
「日名子旅館御案内」	1926年(大正15)	日名子旅館
「別府温泉御遊覧のしをり 日本第一の温泉別府亀の井ホテル御案内」	1927年(昭和2)	亀の井ホテル
「別府市主催 中外産業博覧会」	1928年(昭和3)	別府市
「別府温泉 別府温泉鳥瞰図」	1930年(昭和5)	別府市、亀の井自動車
「日本八景 別府温泉御案内」	1930年(昭和5)	雑誌『主婦の友』8月号付録

注) 別冊太陽『大正・昭和の鳥瞰図絵師吉田初三郎のパノラマ地図』平凡社(2002)より作成

ら黄金期にかけての時期を網羅しており、徐々に初三郎式へと画風が変化していく過程を追うことが出来ることを意味する。

吉田初三郎は1914年(大正3)に大分県の耶馬溪を鳥瞰図に描いており、これが記念すべき九州における第一作といわれている。先述した「京阪電車御案内」を描いた翌年、極めて初期の作品である(図5)。



図5 「耶馬溪御案内」1914年(大正3) 吉田初三郎・画 (筆者蔵)

絵は稚拙で素朴、鳥瞰図としての視点も低く、図の両端にみられる大きな歪みは無い。建物や山の描き方もマンガチックで、全体的に細やかさや精緻さは劣っている。特徴的な表現として、「京阪」「耶馬溪」とともに、山肌を中心に、点々とピンク色の模様がちりばめられており、桜の花を表現している。自身のサインもこれらの絵の中には見られず、「初三郎らしさ」の自己主張はうかがえない。



図6 「別府温泉御案内」1917年(大正6) 吉田初三郎・画 (筆者蔵)

次に1917年(大正6)に別府温泉を初めて描いた鳥瞰図が図6である。これは徐々に初三郎式へと進化する過渡期の画風であるといわれている⁽¹⁰⁾。初期の作品と比べて、かなり立体的な構図へと変化し、視点もかなり高くから見下ろした形となった。但し、図の極端な歪みや、デフォルメした箇所はほとんど無く、別府湾上空から街を斜め下に見下ろした、実際の風景にかなり近い自然な鳥瞰図となっている。右下にはローマ字で「YOSHIDA(○初)」とサインが入るようになり、右上には「絵に就いて一筆」と題したスペースが設けられている。この欄は時代が経つにつれて文章量が増え、次第に鳥瞰図作成に関しての初三郎の感想、観光地に対する考察や提言、その場所の概要などが記されるようになっていった。

写実的な描写の一方、桜の花々と共にモミジの名所を赤く紅葉した状態で描いたり、「沿岸の海上ではどこでも魚釣りが盛んである」として、枠外に魚の群れのイラストを添えてみたり、遊び心のある表現がみられる(図7)。また、別府における重要な観光資源である「地獄」の所在地を、「湯けむり」で表現している点は興味深い。とりわけ、海地獄の湯けむりは、他の地獄と比べても一回り大きく描かれており、その場所を注目させようとした意図がうかがえる。海地獄及びその湯けむりは、作品を経るごとに次第に大きく強調して表現されていった。

1921年(大正10)になると、初三郎は鳥瞰図作成工房「大正名所図絵社」を設立。門弟も増え、初三郎式鳥瞰図も完成の域に達した。図8は1924年(大正13)の別府の街を描いたものである。

別府湾側から市街地を正面に捉え、かなり高い視点で見下ろしている。市街地は巨大化して、碁盤の目の街路が強調して描かれている。これは1909年(明治42)から始まった市区改正事業で整備され、別府の都市の近代化を図ったものである。また、図の両端はU字に歪められ、右端から釜山・対馬・平戸・長崎・雲仙と九州の西側を描き、左端は琉球・台湾・桜島・霧島と遙か彼方までを見通した構図となっている。左側で噴煙をあげているのが阿

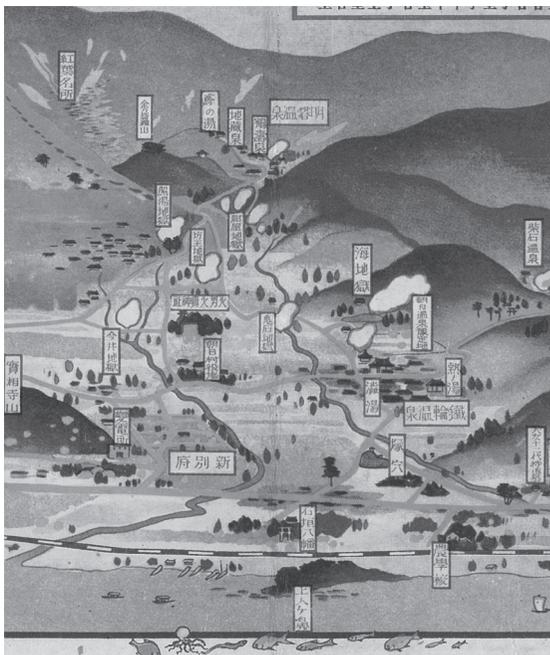


図7 「別府温泉御案内」(図6…部分拡大)

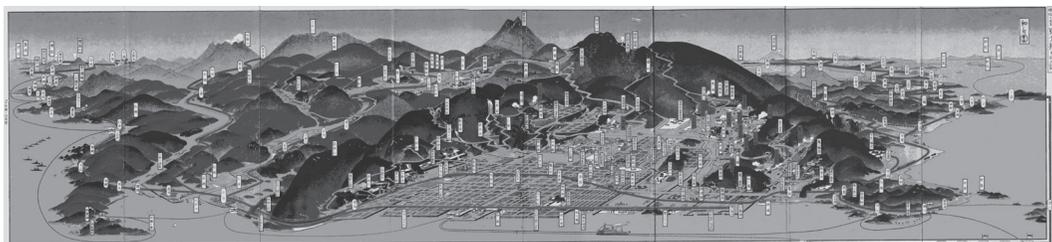


図8 「別府市を中心とせる東九州の交通」1924年(大正13) 吉田初三郎・画 (筆者蔵)

蘇山、中央には由布岳の山容がやや強調して描かれており、見る者にとってのアイストップ的役割を果たしている。先に列挙した地名からも分かるように、この鳥瞰図は別府という一つの都市を大きく描きながらも、一枚の絵の中に、九州のほぼ全ての位置関係を理解できるよう配慮されていると考えられる。

このように一枚の絵の中に圧倒的な情報量を備え、以後、定形化するサインも確認できるようになり、初三郎式鳥瞰図は完成したとされている。と言うのも、前述のとおり鳥瞰図の制作スタイルが工房における分業制であり、弟子たちとの共同作品であるにも関わらず、今日では、初三郎「個人」の画業として積極的に語られ、評価されている。つまり、個人の画風の変遷と判断するには議論の余地が残る。有力弟子の一人であった前田虹映こうえいの息子である前田稀まれしは、工房における弟子の出入りと画風の変化時期が一致することを指摘し、初三郎作の鳥瞰図の多くは、金子常光や前田虹映など当時の弟子が(構図段階から)主体となって描いており、初三郎自身は制作にほとんど関わっていないのではないかと分析している⁽¹¹⁾。先に挙げた耶馬溪(図5)及び別府の鳥瞰図(図6・8)は、

前田の分析によると初三郎の単独作品は最初期の耶馬溪(図5)であり、図6以降は金子常光が主体となった作品⁽¹²⁾、図8以降は前田虹映が主体となった作品⁽¹³⁾であるとみている。この意見に筆者も大きく共感するところである。鳥瞰図作成に関して弟子たちが携わった部分は少なくないはずで、改めて「初三郎式鳥瞰図」の制作主体の学術的再検討が必要であることを指摘しておきたい。

さて、別府における1924年(大正13)以降の鳥瞰図は、図8を定型のパターンとして、鳥瞰図の依頼主に応じて、描くべき対象物を適宜入れ替えながら作品を量産した。すなわち、「構図の使いまわし」をしているのである。その上、描かれた対象物は総じて誇張、巨大化している。依頼主(スポンサー)の施設を図の中央に大きく配置させる構図も、旅館やホテルを描いた鳥瞰図に多く見られた初三郎式鳥瞰図の決まった形式であった。

図9は、別府亀の井ホテル社長であった油屋熊八の依頼で作られた鳥瞰図である。別府港から続

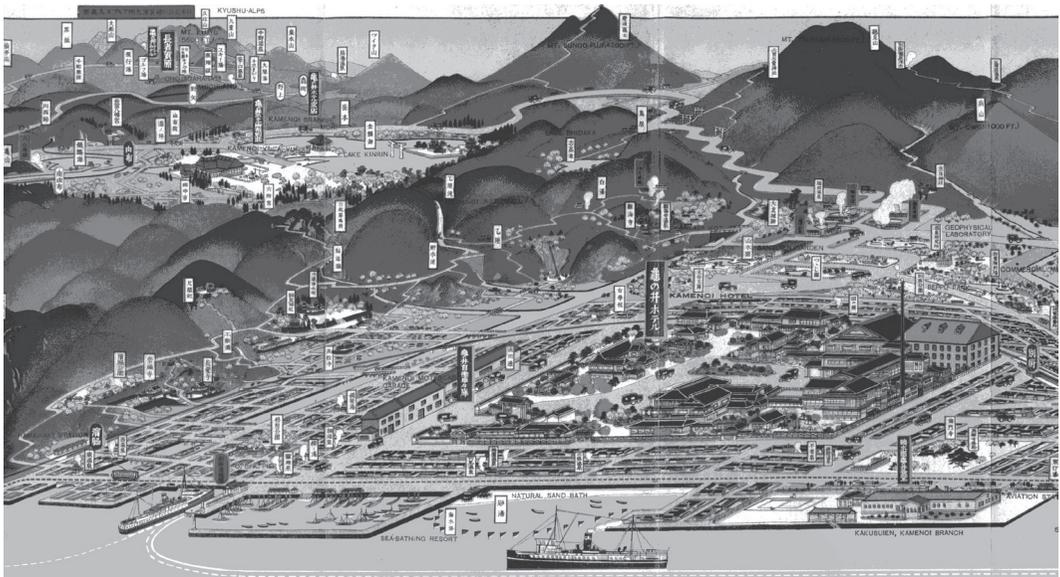


図9 「日本第一の温泉別府亀の井ホテル御案内」(部分拡大) 1927年(昭和2) 吉田初三郎・画 (筆者蔵)

く自動車の列が、次々と亀の井ホテル敷地内に吸い込まれていくように描かれている。また、亀の井の関連施設として「亀の井自動車(車庫)」「鶴水園亀の井食堂」、山を越えた湯布院には「亀の井ホテル由布別荘」、豊後森町の「亀の井ホテル支店」、飯田高原の「亀の井テントホテル」などが際立たせて表現されている。別府の街をはじめ、大分の広範囲にわたって油屋熊八の活動が展開していたことが分かる。

広域・周遊観光を模索していた油屋熊八にとって、避暑地としての役割も想定される湯布院・飯田高原は、当時最も重要視していた場所であった。1925年(大正14)熊八は、吉田初三郎と連れだって飯田高原に遊び、釜ノ口温泉に投宿した。この時、高原の自然と環境に惚れ込んだ熊八は観光地開発を決意、朝日長者の伝説が残る一帯の土地をその適地と決め、初三郎は「長者原」と命名したと伝わっている。図9左側をみると、長者原周辺には飛行場、ゴルフ場、スキー場等のレジャー施設

が書き込まれており、上部の枠内には「日本最高の避暑地、九州アルプス高原」と紹介されている。しかし、実際にはこれらの施設のほとんどは、この時まで存在していなかった。この鳥瞰図発行の翌年、1928年(昭和3)の夏に油屋熊八の案内で飯田高原を訪れた俳人の高浜虚子は、熊八から「ゴルフ場や飛行機の着陸場は、すぐここに出来るようになるだろう」との言葉を聞いたと記録に残している⁽¹⁴⁾。すなわち、鳥瞰図に描かれているこれらの施設の名称は、ほとんどが「予定地」であり、熊八の飯田高原に対する強い開発の思いに、初三郎が絵筆で以って、これを表現したものと理解できる。

油屋熊八との親密な交流に限らず、初三郎は仕事を通じて培ってきた幅広い人脈などを通じて、観光開発やイベント等に対する提言を積極的に行っていた。単なる鳥瞰図絵師にとどまらず、今日の観光プランナーやプロデューサー的役割を担っていたといえる。こうした初三郎の側面が、前述した前田曰く、「工房での制作を弟子に任せて、初三郎本人は自分のブランド力を武器に積極的に社交活動(=営業活動)に励んでいたため鳥瞰図制作に携わる機会は少なかったはずである」と考えている⁽¹⁵⁾。

図10は、1928年(昭和3)に別府市制施行5周年を記念して、4月1日～5月20日までの50日間を

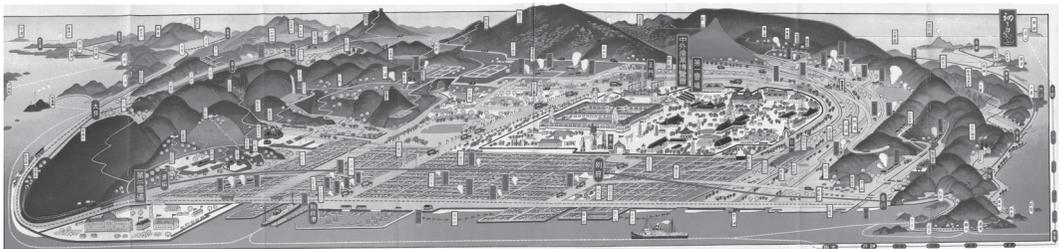


図10 「別府市主催中外産業博覧会」1928年(昭和3) 吉田初三郎・画 (筆者蔵)

会期に別府公園の第一会場、浜脇海岸埋立地の第二会場合わせて80万人もの入場者を記録した「中外産業博覧会」の鳥瞰図である。博覧会場は別府駅の西側、街の中央に大きく描かれている。港から会場である別府公園へと通じる流川通りと、青山通りは明らかに道幅を太く表現していて、会場まで車列が次々と連なっており、大変賑わっている様子が表現されている。大正・昭和初期のこの時期は、国内各地で地方規模の博覧会が相次いで行われており、まさに地方博覧会ブームでもあった。こうした博覧会の開催は、人々の旅行需要を喚起させるとともに、地元においては観光面や経済面での波及効果も大きかった。

中外産業博覧会が開催された1928年(昭和3)は、3月に会場外の野口原に別府大仏(高さ24m、1989年解体)が完成し、同3月には別府市公会堂(現・別府市中央公民館)が完成。6月には浜脇高等温泉が完成している。更にこの頃には、油屋熊八によって全国初の少女車掌ガイド付きの地獄めぐり遊覧バスが運行を開始する等、博覧会の開催は近代別府の観光と、都市景観を大きく進展させるきっかけとなった。

IV 別府温泉へのまなざし

ここで改めて、別府の近代以降のあゆみを確認しておきたい(表2)。半農半漁のひなびた港町であった旧別府・浜脇村は、1871年(明治4)の別府港の整備と、それに伴う大阪航路の開設によって大市場である関西と直結し、定期的に観光客・入浴客が訪れるようになった点、温泉の人工掘削がさかんとなり、旅館の内湯化など浴場の整備が進んだ点、更に鉄道交通網が発達し、1911年(明治44)の日豊本線延伸開業によって北九州と繋がり、それまでの船舶に加えて鉄道によるアクセスが向上した点などによって、明治時代後期には温泉観光地としての体裁が整った。

実際に、明治時代には石版印刷された墨一色刷りの素朴な鳥瞰図⁽¹⁶⁾が土産品として発行されており、多くの旅行者の便に供していたと思われる。例えば、大分市歴史資料館が所蔵する、1902年(明治35)に発行された「豊後国各温泉図」は、現在の別府八湯に相当する地域を5枚に分けて描いている。裏面には街の風景・交通・人口戸数・旅館等の記事が載っており、土産品や旅行先でのガイドブックの役割を果たしていたと思われる。

1906年(明治39)の石版刷り鳥瞰図では、別府八湯は一枚の絵の中におさまり、別府湾上空から街を見下ろした高い視点で、实景に近い自然な描き方をしている(図11)。表面には「温泉案内及医効効用記」という副題が付いて

いる通り、各温泉場の特徴・効能・成分などの記事が詳細に載っている他、旅館の料金表、各温泉場や別府内外の主要地点との里程、名所旧跡情報など、別府における湯治・療養目的、旅行目的両方のニーズに対応できる情報量の多い出版物に仕上がっている。冒頭に、温泉地は近代ツーリズムの影響のもと、湯治場から観光地へと機能を移行する旨を述べたが、図11はその過渡期における出版物とみることもできよう。

表2 別府の近代年表

年	できごと
1871年 (明治4)	別府港完成
1873年 (明治6)	別府⇄大阪航路就航(月1回)
1879年 (明治12)	温泉の人工掘削始まる
1889年 (明治22)	
1900年 (明治33)	別大電車(旧・豊州電気鉄道)開業 →九州最初の「電車」
1909年 (明治42)	市区改正事業に着手 →旧別府町地区に残る基盤の目街路
1911年 (明治44)	別府・亀川・浜脇各駅開業(鉄道開通) 油屋熊八、亀の井旅館開業
1912年 (大正元)	大阪商船「紅丸」就航
1914年 (大正3)	松原公園新設
1920年 (大正9)	別府港 大阪商船棧橋竣工 →大型船の接岸可能。利便性向上
1923年 (大正12)	日豊本線(鹿兒島⇄小倉)開通
1924年 (大正13)	別府市制施行
1926年 (大正15)	鶴見園大劇場開設(九州の宝塚)
1928年 (昭和3)	中外産業博覧会開催 浜脇高等温泉完成 別府市公会堂(中央公民館)完成
1929年 (昭和4)	ケーブルカー開通
1937年 (昭和12)	国際温泉観光大博覧会開催
1938年 (昭和13)	竹瓦温泉改築(現在の建物)

注) 筆者作成

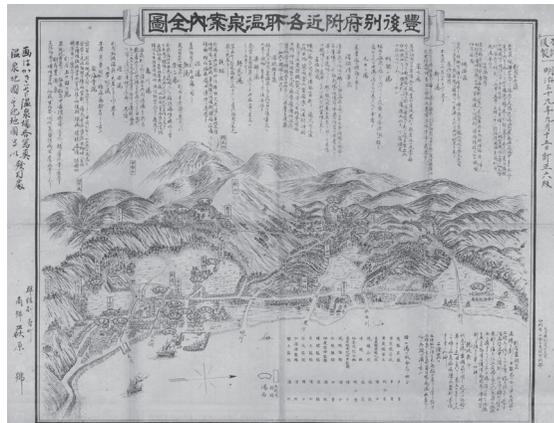


図11 「豊後有名各温泉之図」1906年(明治39)萩原號・発行(別府大学附属博物館蔵)

図12も図11とよく似た記事内容、構図の石版刷り鳥瞰図であるが、大きな違いとして左下側の浜脇一带の市街地が、図の1/4程のスペースを割いて、詳細かつ巨大に描かれている点である(図13)。別府港に朝見川、低い家並みが続く中、浜脇東西(現・湯都ピア浜脇)をはじめとする各浴場、社寺、病院等が丹念に描写され、発行当時の街の様子が良く分かる。海岸沿いに延びる黒白のラインは、1900年(明治33)開業の豊州電気鉄道(九州初の電車)の線路。その奥に高くそびえる煙突は、鉄道に電気を供給するために全国で2番目につくられた火力発電所である。高い建物の少なかった当時、この煙突はかなり遠くからも目立つ存在だったと思われ、立ち上る煙を含めて象徴的に描かれている。

詳細な描写の浜脇周辺の一方、境川から北側の鉄輪・亀川までの間、現在の石垣地区周辺は省略されて描かれており、後の初三郎式鳥瞰図にも通じるデフォルメが、この時期に既に認められる。すなわち、個性的な初三郎式鳥瞰図といわれているが、別府に関していえば、構図・市街地の拡大描写などは、明治の石版刷り鳥瞰図の表現に影響を受けた可能性は十分考えられるだろう。

さて、明治時代後期までを、近代温泉観光地・別府の発展段階の「黎明期」とするならば、前述した中外産業博覧会が開催された1928年(昭和3)前後までは「発展期」といえるだろう。大正以降、別府港における栈橋竣工をはじめ、都市基盤や観光施設の整備が相次ぎ、別府の街は近代ツーリズムの申し子として長足の進歩を遂げた。1930年(昭和5)に初三郎が描いた別府の鳥瞰図(図14)には、船や鉄道、路面電車や自動車などが次々と行き交い、エネルギーに活動している様子がよく伝わってくる。鉄輪周辺の地獄地帯は湯けむりがひと際大きく描かれ、各地の名所・行楽地なども色を分けて表記する等、別府における初三郎式鳥瞰図の集大成的作品となっている。鳥瞰図裏の別府を紹介する記事には、「四通八達の別府温泉」として関西圏はもとより、各地からのアクセスのしやすさを謳っている。他にも「天下の楽園別府温泉」、豊富な湯量を誇ることから「湯の上に浮かぶ街・別府」という見出しも付けられている。

目を引くのは、巨大化して描かれている市街地と「碁盤の目」状街路である。これは1909年(明治



図12 「豊後有名温泉之図」1908年(明治41)友永松三郎・発行(別府市立図書館蔵)

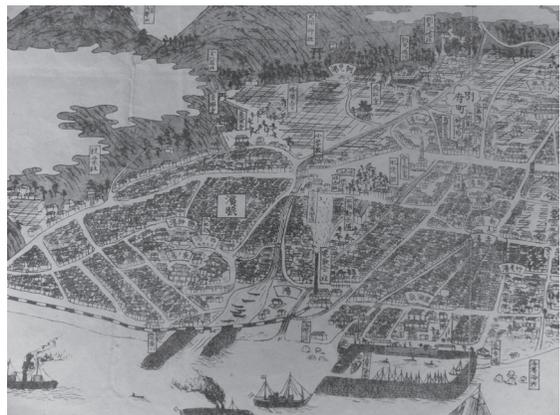


図13 「豊後有名温泉之図」(図12…部分拡大)

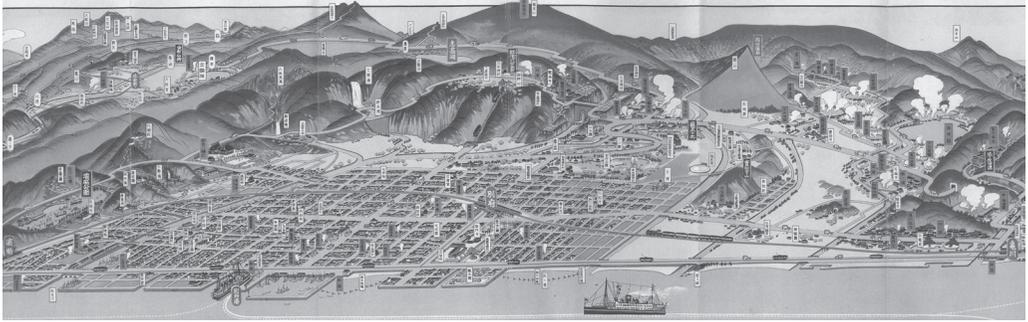


図14 「別府温泉鳥瞰図」(部分拡大) 1930年(昭和5) 吉田初三郎・画 (筆者蔵)

42)から行われた市区改正事業、耕地整理事業による。市区改正とは、明治から大正時代にかけて東京など大都市を中心に行われた都市計画・都市改造事業を指す。地方都市である別府において、市区改正が全国的にみても早い段階で実施されたのは注目すべきことである。

図15は旧別府町の地図である。市区改正前夜に発行されたと思われる、予定道路として旧来の集落・街路上に、グリッド状街区が点線で表記されている。別府の従来の集落形態は、南北に通じる旧豊前街道と、港からのびてきた通り沿いに形成されていた。海側に寄って展開していた市街地は、西側(山手側)に大きく街区が広がり、次第に住宅・

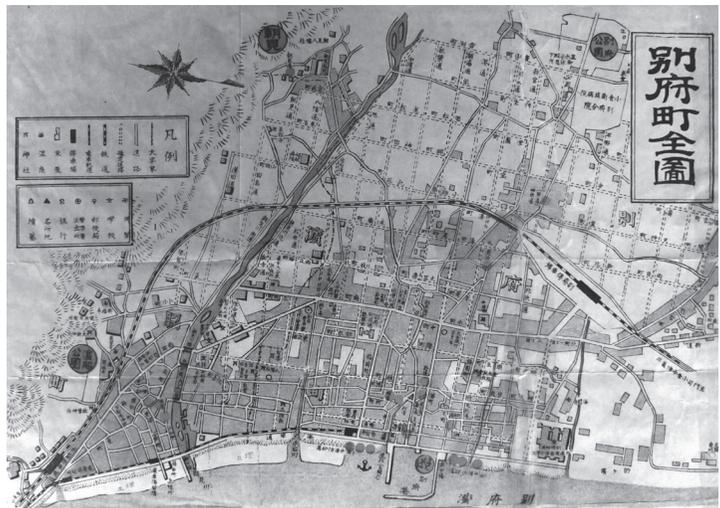


図15 「別府町全圖」明治時代後期頃(別府市立図書館蔵)

旅館・別荘地などで埋まっていった。市区改正は、江戸時代以来の街路筋に展開していた「線状」の集落・街路形態から、郊外エリアを市街地に編入させることで、「面的」に広がる形状へと一変させた。すなわち、先述した明治期の石版刷り鳥瞰図は、市区改正前である江戸時代以来の別府の集落景観・街路景観の様子を今に伝える貴重な資料といえる。

また、市区改正事業の結果は、繁華な別府のメインストリートである「流川通り」を誕生させ、東西方向の都市軸を強化させることにもなった。山手へと延長された流川通りは、乙原山の麓で行き止まりとなる。しかし、その先に1929年(昭和4)にケーブルカーの軌道が敷設されたことで、港→流川通り→ケーブルカーを經由して、一気に山頂まで駆け上がる都市軸が生まれた。現在でも「別府ラクテンチ」として営業している乙原山は、もともと鳥取県の事業家・木村久太郎によって1903年(明治36)に金鉱山として開発されたものを、廃鉱後に木村がケーブルカー付きの山上遊園地としてリニューアルさせたものである。船で別府に降り立った旅行者にとって、港から真っすぐ伸びる

道筋は、ケーブルカーや遊園地に誘客する為の視覚効果としては十分だったと考えられる。山頂の遊園地からは、別府の市街地を一望のもとに見渡すことが出来た。それは、鳥瞰図という紙に描かれた「景観イメージ」を、実際に自分の目で気軽に見られる場所である「展望の場(視点場)」が登場したといえる。眼下に整然と広がる別府の碁盤目状街区は、訪れた人に強い印象を与えたに違いない。

ここまで別府を描いた鳥瞰図をみてきたが、これらには共通して描く向きが決まっている。それは海側から別府の街を描いていることである。そして海上には必ず、大きな船の姿が描かれている。この構図は、明治の石版刷り鳥瞰図でも、初三郎式鳥瞰図でも、初三郎が別府を離れてより広域的な九州地方を描いた際も、また初三郎ではない別の絵師が描いた鳥瞰図でも皆、海側から見た視点で描いている。それは、別府が海から訪れる街だったからに他ならない。

別府港は1873年(明治6)開設の大阪航路の他に、広島・四国・宮崎県細島などと瀬戸内海を介して各地と繋がっていた。こうした多くの旅客航路の他に、「湯治船」といって広島・四国方面から自前の船で寝泊まりしながら、浜脇・別府温泉に通う湯治習慣が古くからみられ、戦後しばらくまで続いていた。春には港に係留される船は100艘近くにのぼり、「湯治船」は俳句の季語になるほど、別府の春の風物詩となっていた。初三郎は別府の鳥瞰図の表紙に、湯治船の様子を描いて載せている(図16)。

このように、当時の別府への来訪者の多くが、海路を利用してやってきた。それは1911年(明治44)に別府にも鉄道が開業し、小倉方面とのアクセスが向上してもなお、別府の交通の主役は「海」であり、「船」であった⁽¹⁷⁾。それは当時、発行された別府を写した絵はがきの中でも、船と栈橋の様子、海越しに見た別府の町並みなどのカットが数多く作られたことから分かる(図17・18)。別府を象徴する記号として「海」は認識さ



図16 「別府温泉鳥瞰図(表紙)」1930年(昭和5)
吉田初三郎・画(筆者蔵)



図17 「定期船の解纜(別府百景)」昭和初期(筆者蔵)

れていたといえる。

すなわち、鳥瞰図が描く海から見た別府の姿、「海からの眺望」は別府を訪れる旅行者の多くの視覚的経験であり、別府を訪れたことを実感できる印象の風景、来訪者の「視点」に他ならないのである。

しかし、別府を描いた鳥瞰図の中で一点だけ逆の向きで描かれている鳥瞰図が存在する。それは山側から



図18 「海上より見る別府市街(別府百景)」昭和初期 (筆者蔵)

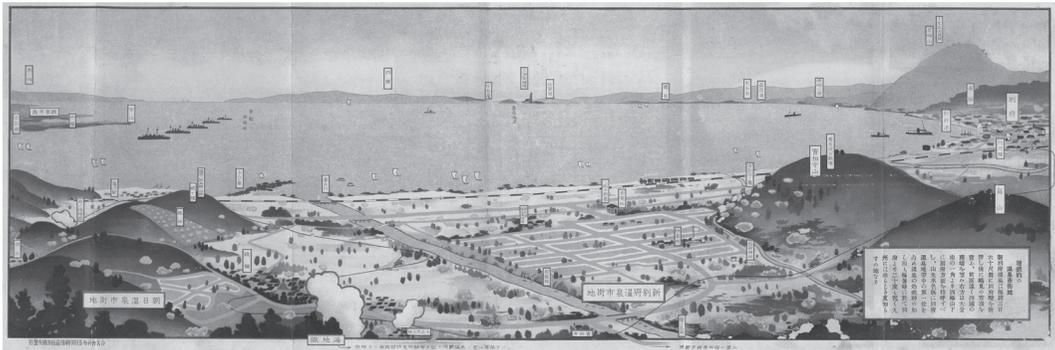


図19 「豊後新別府温泉御案内」1923年(大正12)頃 吉田初三郎・画 (筆者蔵)

別府の街を見下ろしている構図である。図19は、吉田初三郎が描いた鳥瞰図で、別府の街を山側からの視点で描いた恐らく唯一のものである。正確な発行時期は分からないが、図中、別府から山手を抜け、実相寺山麓から新別府、鉄輪方面を結んだ鉄道路線が実線で示されており、その計画出願の時期を考慮して1923年頃ないしは、それ以前と判断した⁽¹⁸⁾。しかし、この鉄道は予定線であって、実現することは無かった。観光資源化の進んだ鉄輪の地獄地帯を経由する山の手の周遊交通としては、1917年(大正6)の九州自動車を皮切りに各自動車会社が参入しており、更に1927年(昭和2)には亀の井自動車が、地獄めぐり遊覧バスを運行していた。上述の鉄道ルートは実現しなかったが、近代の別府観光、地獄めぐり遊覧の需要がそれだけ高かったことの証左でもある。

図19の鳥瞰図の表題は「理想の楽土 豊後新別府温泉御案内」とある。図中央、春木川沿いの新別府地区は大きくグリッド状の街区で表現されている。豊富な湯量を持つ温泉と、大都市からの交通アクセスの向上は、温泉付き別荘地の需要を高めることにもなった。別府では大正時代に、山の手を中心に盛んに土地開発が行われていた⁽¹⁹⁾。この新別府は最も早い段階の分譲開発地で、1914年(大正3)から新別府温泉土地会社によって手掛けられた。社長は竹田市出身で鉄道省技官であった事業家の千寿吉彦。分譲地に配湯する温泉は、「海地獄」からパイプラインによって供給されていた。一区画300坪で販売され、主に東京・関西圏の富裕層が購入していた。現在でも新別府の景観は、

整然とした道路区画が残り、閑静な住宅街を形成しているのは上述の理由によるものである。

このように、図19の鳥瞰図はこれまでみてきた「観光目的」のものでは無く、分譲別荘地を販売するパンフレットなのである。裏面は新別府温泉の特色として、交通の便の良さ、市街設備やライフラインの充実、土地の安さなどが謳われ、また各界文化人や有識者などが、新別府の良さを褒め称えたコメントも掲載されており、読み手に土地の購入を勧めている。分譲地において、眺望の良さは絶対的なアピールポイントであり、それを鳥瞰図上に表現することで、土地の購入希望者は、これを見て具体的なイメージを膨らませることが出来る。よって、図19における山からの眺望で描いた構図は、別府に住む人の「視点」であり、吉田初三郎は、別府を訪れる人、住まう人の視点で鳥瞰図の構図を明確に描き分けていたのである。

最後に、広域的な視点から近代ツーリズム期における別府の立地について考えてみたい。図20は吉田初三郎の弟子であった前田虹映が工房から独立後、1940年(昭和15)に紀元2600年を記念して作成した「九州観光図絵」と呼ばれる鳥瞰図である。中央に噴煙たなびく

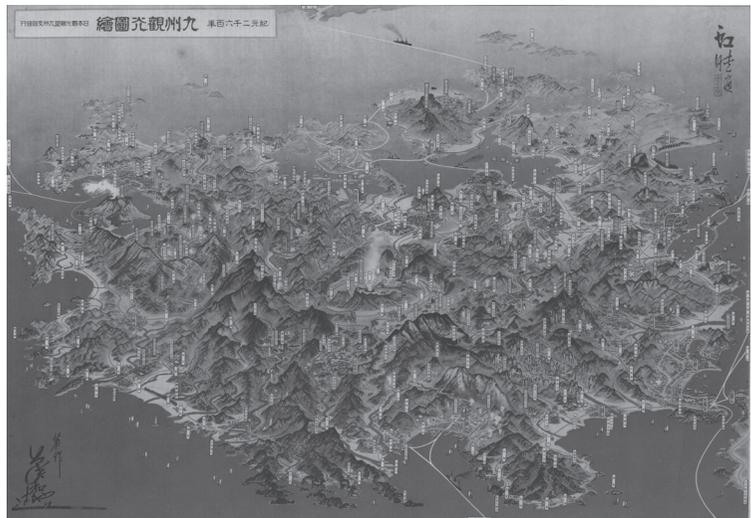


図20 「紀元二千六百年九州観光図絵」1940年(昭和15)前田虹映・画(筆者蔵)

阿蘇山、上に長崎、下に別府を配した構図となっている。

前述しているが、日本の近代において観光は、外国人観光客を誘致して外貨獲得を目指す上での必要な国策として重要視されていた。その為には、いかに外国人を日本に長期滞在させ、より多くの観光消費をさせるかがポイントとなる。そこで政府は、外国人観光客が日本を周遊するためのモデルコースを設定し、そのルート上に位置する観光地や、宿泊施設、また余暇施設などの整備を行っていった。とりわけ宿泊施設においては、外国人観光客が安心・快適に泊まれるように、西洋風のホテル施設の整備が進められた。「国際観光ホテル」として、1930年代を通して全国に14ヶ所が建設され、その建設資金を国が融通し、九州内では阿蘇・雲仙・唐津の三ヶ所が建設された。

こうして整備された国際観光の周遊モデルコースの一つが、「西日本国際観光ルート」と呼ばれ、関西から瀬戸内海航路を経て別府へ、さらに阿蘇・雲仙・長崎に至るルートが設定された。そして、長崎からは航路で上海へとつながる壮大なプランであった⁽²⁰⁾。瀬戸内海は早くから外国人観光客には人気があり、その風景を欧米人たちが既に19世紀から絶賛していた他⁽²¹⁾、雲仙も上海をはじめとする中国大陸に住む欧米人外交官や商人たちの避暑地・別荘地として既に開発が進んでおり、よく知られた存在であった。

すなわち、1930年代の国家的な観光戦略の中で別府は、西日本国際観光ルートの要衝であり、「九州の玄関口」としての地理的優位性を高めていたのである。作者である前田虹映や吉田初三郎が、このような状況を意識していたかどうかは不明であるが、図20における中央を西日本国際観光ルートが貫く構図や、図の両端を極端に歪め、実際には見えない場所をも実際に見えているかのように、一枚の絵の中におさめる初三郎式鳥瞰図の構図は、結果的に「九州の玄関口」である別府の様子を、見る者に強く印象付ける効果をもたらしたといえるだろう。

V おわりに

本稿では、近代ツーリズム期において描かれた初三郎作品を中心とする鳥瞰図の特色を分析し、別府温泉郷の景観イメージについて考察してきた。以下に結果をまとめる。

- ①吉田初三郎作品の変遷は、図3・5にみられる「初期の画風」(~1917年頃)、過渡期といわれる実景に近い自然な鳥瞰図が特徴の図6・19(~1923年頃)、巨大化とデフォルメ、歪みや省略など「初三郎式」が確立する図8(~1924年頃)、以後は、図8を定型パターンとして依頼主に応じて描くべき対象物を適宜入れ替えて作品を量産した(~1930年)。
- ②一方で、工房による弟子との共同作品である性格上、巷間伝わっているような初三郎個人の画業の変遷として評価することは難しく、検討の余地が残る。
- ③別府においては1871年(明治4)の別府港整備と、大阪航路の開設、温泉の人工掘削と旅館の内湯化、1911年(明治44)の鉄道開通による交通網の整備により、明治時代後期までを、発展段階の「黎明期」と位置付けられる。
- ④この時期に発行された石版刷り鳥瞰図では、後の初三郎式鳥瞰図に通じる主要対象物の誇張や、省略表現などが認められる。
- ⑤1920年(大正9)の別府港棧橋竣工による大型船の接岸、1928年(昭和3)の中外産業博覧会開催を前後とする都市基盤や観光施設の相次ぐ整備により、別府は「発展期」を迎える。
- ⑥1909年(明治42)から行われた市区改正事業の結果、別府の都市構造は面的広がりをみせるとともに、繁華街・流川通りを誕生させ、東西方向の都市軸が強化された。1929年(昭和4)ケーブルカーと山上遊園地の開設は、「景観イメージ」を自分の目で気軽に見られる「展望の場(視点場)」が登場したことを意味する。図14における乙原山を中央に配置して大きく描き、ケーブルカーの姿、別府港へと一直線に通じる流川通りの太い道幅と行き交う車列は、新しく誕生した観光資源へのまなざしと、来訪者に対する強い訴求力の表れである。
- ⑦別府を描いた鳥瞰図にもれなく共通する構図は、海側から別府の街を描いていることと、海上に大きく船の姿を描き入れていることである。それは、近代別府の交通の主役が船舶であり、「九州の玄関口」として海に開かれていた都市だからである。すなわち、鳥瞰図が描く海から見た別府の姿は、来訪者の視点に他ならない。
- ⑧一方で、吉田初三郎は唯一山側の視点で別府の鳥瞰図を描いている(図19)。それは分譲地開発の

案内用であり、別府に住む人の視点といえる。来訪者、居住者それぞれの視点で鳥瞰図の構図を明確に描き分けていた工夫が読み取れる。

客船の黄金時代には「九州の玄関口」であった別府は、1942年(昭和17)関門鉄道トンネルが開通し、鉄道によって本州と九州が直結、更には1975年(昭和50)山陽新幹線博多開業によって、船舶から鉄道へとその座を小倉・博多へと譲った。別府を発着するフェリー航路は平成以降、廃止、減便、運航会社の合理化などが相次ぎ、現在の別府国際観光港に往時の面影は感じられない。

交通の主役が客船から鉄道、そして自動車(高速道路)へと移行している現在、別府への来訪者の多くは、高速道路を使って福岡方面から訪れている⁽²²⁾。とすれば、高速道路(例・明礬橋)から見下ろした別府の街と湯けむりや、彼方に高崎山と別府湾が広がる光景が、現代別府の来訪者の視覚的経験であるといえる。近代における「海越しに見る別府の風景」から、現代における「山(=高速道路)から見下ろす別府の風景」へと、別府の街を印象付ける「視点場」が変化してきたとも考えられる。

付記：本稿は、シンポジウム「別府の温泉地景観」(2013年(平成25)11月30日、於：別府大学メディアホール)での基調講演の内容を元に、加筆修正したものである。

参考文献・注

- ・大久保純一(2004)：「広重と江戸鳥瞰図」『国立歴史民俗博物館研究報告』109集，p21～45
- ・大山琢央(2012)：「近代ツーリズムと鳥瞰図(パノラマ地図)」『パノラマ地図と旅』鞆の浦歴史民俗資料館展示図録，p58～63
- ・大山琢央(2007)：「近代における別府鉄輪温泉の諸相」『史学論叢』37号，p1～15
- ・白幡洋三郎(1996)：『旅行のススメ』中公新書1305，中央公論社
- ・関戸明子(2007)：『近代ツーリズムと温泉』ナカニシヤ出版
- ・高橋伴幸(2005)：「橋本玉蘭齋が描いた都市鳥瞰図の空間構成－横浜を描いた鳥瞰図を中心に－」『茨城地理』6号，p37～52
- ・中西遼太郎(2010)：「明治・大正期の巖島を描いた鳥瞰図」『歴史人類』38号，p59～83
- ・中西遼太郎・関戸明子編(2008)：『近代日本の視覚的経験 絵地図と古写真の世界』ナカニシヤ出版
- ・藤本一美(2001)：「[大正広重]吉田初三郎の世界」『鳥瞰図絵師の眼』INAX出版，p22～27
- ・堀田典裕(2009)：『吉田初三郎の鳥瞰図を読む 描かれた近代日本の風景』河出書房新社
- ・益田啓一郎(2008)：「印刷技術の進化と初三郎作品」『美しき九州の旅』北九州市立自然史・歴史博物館展示図録，p102～3
- ・松田法子(著)・古城俊秀(監修)(2012)：『絵はがきの別府 古城俊秀コレクションより』左右社

・森正人(2010)：『昭和旅行誌－雑誌『旅』を読む』中央公論新社

- (1) 20世紀に入り、国の産業が重工業にシフトしてくると、労働者の他に、専門技術者や生産管理、事務作業に従事する人たちが必要とされた。新中間層は大正時代には成立していたが、昭和時代に入るとその数は拡大した。 森(2010)p9
- (2) 仲居や給仕へのチップのこと。当時の日本の旅館ではチップ制が行き渡っており、宿泊者にとって煩わしい習慣を撤廃することが、旅行の発展と近代化の為には不可欠とされた。 白幡(1996)p56～58、森(2010)p30～34
- (3) 1912年(大正元)鉄道省が中心となり、外客誘致組織であるジャパン・ツーリスト・ビューロー(現在のJTBの前身)が設立。更に1930年(昭和5)には鉄道省内に国際観光局が設置され、本格的な国際観光政策が始まり、海外へ積極的に日本の観光情報を発信した。
- (4) 「美しき東北の街並み～鳥のまなざし 吉田初三郎の世界～」東北歴史博物館(2013)、「美しき九州の旅－「大正広重」初三郎がえがくモダン紀行－」北九州市立自然史・歴史博物館(2008)、「吉田初三郎と八戸」八戸市博物館(2006) …など。
- (5) 日本古地図学会編(2000)：「吉田初三郎特集」『古地図研究』307号、湯原公浩編(2002)：『別冊太陽 大正・昭和の鳥瞰図絵師 吉田初三郎のパノラマ地図』平凡社、堀田典裕(2009) …など。
- (6) 芸術作品の制作方法として「分業制」は特段珍しい方法では無い。現代のマンガ・アニメの他、古くは浮世絵や西洋画でも分業・工房の制作スタイルは取られている。
- (7) 堀田(2009)p14～18
- (8) 益田(2008)
- (9) 前掲(7)、相次ぐ粗悪な類似品・模倣品などに対して、1928年(昭和3)に発行された初三郎の鳥瞰図には、偽物物に注意すると共に、民法・著作権法に照らして厳正に対処する旨を示したコメントが掲載されていて、ちょうど当時の初三郎人気が高まっていた頃と符合する。
- (10) 北九州市立自然史・歴史博物館(2008)p26～27
- (11) 2013年(平成25)11月15日 別府大学33号館に於いて、前田稀氏からの御教示。
- (12) 金子常光の工房への入門時期は1916年(大正5)頃とされている。 前田稀氏提供資料より
- (13) 前田虹映の工房への入門時期は1921年(大正10)。翌22年(大正11)には金子常光らが工房を離れ、「日本名所図絵社」を興して独立している。
- (14) 高浜虚子(2005)：「別府温泉」『日本八景－八大家執筆』平凡社ライブラリー531
- (15) 前掲(11)
- (16) 本稿では便宜上、「石版刷り鳥瞰図」と呼称する。
- (17) 別府大阪間を当時の鉄道と船舶と比較すると、所要時間は鉄道では18時間、船舶は20時間。運賃では鉄道が10円88銭で、一方の大阪商船は3等料金が6円と格安であり、総合的に見れば船舶の方が利用しやすかったと言える。

- (18) 田尻弘行(2006):『RM LIBRARY85 大分交通別大線』ネコ・パブリッシング p13~15

1924年(大正13)9月に広島瓦斯電軌(株)(社長・松本勝太郎)により出願。しかし、前田稀が指摘する金子常光主体の鳥瞰図のタッチ、新別府の開発は既に1914年(大正3)から始まっている点などを踏まえると、鳥瞰図の発行時期は、鉄道出願時よりも遡るのではないかと考えられる。

- (19) 高砂淳(2000):「温泉リゾートと郊外地開発－観海寺、別府荘園文化村計画」『近代日本の郊外住宅地』鹿島出版会, p499~514、中山昭則(2003):「大正期における別府温泉の別荘地開発」『温泉地域研究』創刊号, p17~22

- (20) 砂本文彦(2000):「阿蘇観光ホテルと国際リゾート地開発」『日本建築学会計画系論文集』529号, p271~278

- (21) 西田正憲(1999):『瀬戸内海の発見 意味の風景から視覚の風景へ』中公新書1466, 中央公論新社

- (22) 1998年(平成10)に海地獄で行った調査では、別府までの主な交通機関は圧倒的に自家用車(53.6%)であり、市場構成も九州(46.1%)が多く、かつ福岡が26.9%を占める。浦達雄(2005):「別府温泉における観光客の動向」『大阪明浄大学紀要』5号, p13~25